

## 伝小堀遠州筆『異本百人一首』の紹介

表象文学部・日本語日本文学科 吉海直人

### 【要旨】

百人一首の唯一の異本として、百人秀歌型の配列を有する「異本百人一首」が存在する。かつてその存在を発見・報告したことがあるが、今回は近世初期に定家様で書写された伝小堀遠州筆の卷子本が見つかったので、それを紹介したい。小堀遠州は小倉色紙の模写のみならず、百人一首及び異本百人一首を複数回書写しており、百人一首の研究史において看過できない人物である。

### 【キーワード】

百人一首・異本・小堀遠州

百人秀歌と百人一首の中間本とでも称すべき奇妙な百人秀歌型配列「異本百人一首」の存在については、かつて報告したことがある（「百人秀歌型配列の異本百人一首について」和歌文学研究61・平成2年10月）。その本文として、跡見学園女子大学短期大学部図書館所蔵の伝小堀遠州筆「百人一首」も翻刻紹介した（「百人一首」の再検討」同志社女子大学日本語日本文学3・平成3年10月）。

その後、同様の異本が少なからず存在していることが明らかになってきたが、古い写本が発見されないことから、後世の混雑本として片付けられた感がある。その後かろうじて猪苗代兼載まで遡ることができたが（「百人一首兼載抄」の翻刻と解題」同志社女子大学日本語日本文学12・平成12年10月）、それでも百人秀歌と百人一首の成立にかかわる資料として位置付けられるまでには至っていない。

ところが面白いことに、近世初期の百人一首歌かるたの本文が、「異本百人一首」特有の本文と一致していることがわかり、別の視点から注目されるようになってきた（『百人一首入門』淡交ムック・平成16年12月）。もっとも、百人一首の本文そのものが徹底的に調査されているわけではないので（「異本百人一首の本文」『百人一首かるたの世界』新典社新書・平成20年12月）、今のところはそういった傾向が認められるというところで留めておきたい。

今後は近世初期の写本・版本のみならず古い歌かるたの本文を広く調査した上で、改めて本文の問題を考えなくてはなるまい。その意味でも、異本百人一首の本文提供が急務と思われるので、ここに伝小堀遠州筆（定家様）「異本百人一首」を紹介する次第である。小堀遠州は定家様の名手であり、かつて梓澤要著『百枚の定家』（新人物往来社・平成10年11月）で、「小倉色紙」の筆者として取り上げられたこともある。確かに遠州筆「小倉色紙」が存しているようだし、遠州は定家様で百人一首や「異本百人一首」を複数回書写している。要するに遠州は通行の百人一首以外に、配列の異なる異本百人一首の存在を承知の上で、それを書き分けていたことになる。光悦筆古活字本の存在を含めて、近世初期における異本百人一首の存在は、必ずしもマイナーではなかったようである。

ここで簡単に本書の書誌を記しておこう。卷子本「百人一首」。影月堂文庫蔵。外題・内題ともになく、外箱に「百人一首」と直書きされている。その蓋の裏に「小堀遠州政一宗甫居士筆」と書かれている。また極札が付いており、「小堀遠州政一 百人一首秋の田の 琴山」という極めが記されている。裏には「巻物己巳九」とあるが、己巳は寛永六年（一六二九年）のことであろうか。

料紙は鳥の子で、金銀泥によって草花模様を描かれている。タテ24.4cmの紙を七枚継いでいる。第一紙は79.5cm、第二紙が91.0cm、第三紙が56.4cm、第四紙が91.0cm、第五紙が91.9cm、第六紙が93.4cm、第七紙が60.9cmとなっている。第五紙と第六紙に錯簡が生じているようで、これを貼り替えるときちんと百人秀歌型配列になる。また第三紙のみかなり短くなっている。

本文は典型的な定家様で書かれている。それは跡見本と共通だが、相違点としては、跡見本が冊子なのに対して影月堂本は卷子本であること、また跡見本が和歌一行書きであるのに対して、影月堂本は和歌二行書きになっている点である。本文の特徴は、跡見本とほぼ一致しているが、全体的に影月堂本の方が平仮名表記がやや多くなっている。

その他、いくつか本文の特徴も認められる。例えば45番歌は「おもほえず」ではなく「おもほえず」となっている。また50番歌は「けるかな」ではなく「ぬるかな」

となっている。62番歌は「夜をこめて」の「を」が欠けている。これは脱字であろうか。88番歌は「なには江の」とあるべきところ、記憶違いか「なにはかた」と書かれている。

以上、ごくわずかな違いが認められるものの、細部にわたってほぼ跡見本と一致している。最後に異本百人一首の本文の特徴を列記しておきたい(カッコ内は百人一首)。

43番作者表記 中納言敦忠(↓権中納言) \*百人秀歌と一致

物も(↓ものを) \*百人秀歌と一致

49番 もえ(↓もえて)

50番 ぬるかな(↓けるかな) \*百人秀歌と一致

55番 滝の糸は(↓滝の音は)

66番作者表記 前大僧正行尊(↓大僧正行尊) \*百人秀歌と一致

68番 この世に(↓うき世に)

73番作者表記 前中納言(↓権中納言)

74番 山下風よ(↓山おろし)

85番 あげやらぬ(↓明けやらて)

92番 我恋は(↓わか袖は)

98番作者表記 正三位(↓従二位) \*百人秀歌と一致

こういった本文の特徴があれば、異本百人一首である可能性が高い(かるたも同様)。ただし素庵本百人一首など、通行の百人一首でありながら異本百人一首に近い本文を有するものもあるので、百人一首本文の拡がり(不統一)も露呈している。

【翻刻】

天智天皇

1 秋の田のかりほの庵のとまをあらみ

わか衣手はつゆにぬれつゝ

持統天皇

2 春すきて夏きにけらし白妙の

ころもほすてふあまのかく山

柿本人丸

3 あしひきの山鳥のおのしたり尾の

なかくし夜をひとりかもねむ

山邊赤人

4 田子の浦に打出て見れば白妙の

ふしのたかねに雪はふりつゝ

中納言家持

6 かさゝきのわたせるはしにをく霜の

しろきを見れば夜そ更にける

安陪仲麿

7 あまの原ふりさけ見ればかすかなる

みかさの山にいてし月かも

参議篁

11 わたの原八十嶋かけてこき出ぬと

人にはつけよあまのつり舟

猿丸大夫

5 おく山に紅葉ふみわけなく鹿の

こゑきく時そあきはかなしき

中納言行平

16 たちわかれいなはの山の峯におふる

まつとしきは今かへりこむ

在原業平朝臣

17 ちはやふる神代もきかす立田かは

からくれなるに水くゝるとは

藤原敏行朝臣

18 住の江の岸による浪よるさへや

ゆめのかよひち人めよくらむ

陽成院

13 つくはねの峯よりおつるみな河

こひそつもりてふちとなりぬる

小野小町

9 花の色はうつりにけりないたつらに

我身世にふるななめせしまに

喜撰法師(1紙)

8 わか庵は宮このたつみしかそすむ

世をうち山と人はいふなり

## 僧正遍昭

12 あまつ風雲のかよひち吹とちよ  
をとめのすかたしはしとゝめん

## 蟬丸

10 これやこのゆくもかへるもわかれては  
しるもしらぬもあふさかの関

## 河原左大臣

14 みちのくのしのふもちすり誰ゆへに  
みたれそめにし我ならなくに

## 光孝天皇

15 君かため春の野にいてゝわかなつむ  
わか衣手に雪はふりつゝ

## 伊勢

19 難波かたみしかき葦のふしのまも  
あはてこの世をすぐしてよとや

## 元良親王

20 わひぬれば今はたおなしなにはなる  
身をつくしてもあはむとそ思

## 源宗于朝臣

28 山さとは冬そさひしさまさりける  
人めも草もかれぬとおもへは

## 素性法師

21 今こむといひしはかりに長月の  
あり明のつきを待いてつる哉

## 菅家

24 このたひはぬさもとりあへず手向山  
もみちのにしき神のまにゝ

## 壬生忠峯

30 在明のつれなく見えしわかれより  
あかつきはかりうき物はなし

## 凡河内躬恒

29 心あてにおらはやおらむ初霜の  
をきまとはせるしら菊のはな

## 紀友則

33 ひさ方のひかりのとけき春の日に  
しつ心なく花のちるらむ

## 文屋康秀

22 吹からに秋の草木のしほるれば  
むへ山かせをあらしといふらむ

## 紀貫之

35 人はいさ心もしらすふるさとは  
花そむかしの香に匂ひける

## 坂上是則

31 朝ほらけありあけの月と見るまでに  
よしのゝさとにふれる白雪

## 大江千里

23 月見れば千々に物こそかなしけれ  
我身ひとつの秋にはあらねと」(2紙)

## 藤原興風

34 たれをかもしる人にせむたかさこの  
松もむかしの友ならなくに

## 春道列樹

32 山河に風のかけたるしからみは  
なかれもあへぬもみちなりけり

## 清原深養父

36 夏の夜はまたよひなから明けぬるを  
雲のいつこに月やとるらむ

## 貞信公

26 をくら山みねの紅葉々心あらは  
いまひとたひのみゆきまたなむ

## 三条右大臣

25 名にしおはゝあふさか山のさねかつら  
人にしられてくるよしもかな

## 中納言兼輔

27 みかのはらわきてなかるゝいつみ河  
いつみきとてかこひしかるらむ

参議等

39 あさちふの小野のしのはら忍ふれと  
あまりてなとか人のこひしき

文屋朝康

37 しらつゆに風の吹しく秋のゝは  
つらぬきとめぬ玉そちりける

右近

38 わすらるゝ身をは思はずちかひてし  
人のいのちのおしくもある哉

中納言敦忠

43 あひ見ての後の心にくらふれは  
むかしは物もおもはさりけり

平兼盛「(3)紙」

40 しのふれと色にいてけり我こひは  
ものやおもふと人のとふまで

壬生忠見

41 恋すてふわか名はまたき立にけり  
人しれすこそおもひそめしか

謙徳公

45 あはれともいふへき人はおもほえず  
身のいたつらに成ぬへきかな

中納言朝忠

44 あふ事のたえてしなくは中々に  
人をも身をもうらみさらまし

清原元輔

42 契きなかたみに袖をしほりつゝ  
すゑのまつ山なみこさしとは

源重之

48 風をいたみ岩うつ浪のをのれのみ  
くたけてものをおもふころかな

曾祢好忠

46 ゆらのとをわたる舟人かちをたえ  
行衛もしらぬこひのみちかな

大中臣能宣朝臣

49 みかき守衛士のたく火のよるはもえ  
ひるはきえつゝものをこそ思へ

藤原義孝

50 君かためおしからさりしいのちさへ  
なかくもかなとおもひぬるかな

藤原実方朝臣

51 かくとたにえやは伊吹のさしもくさ  
さしもしらしなもゆるおもひを

藤原道信朝臣

52 あけぬれはくるゝ物とはしりなから  
猶うらめしきあさほらけかな

惠慶法師

47 やへむくらしけれるやとのさひしきに  
人こそみえね秋はきにけり

三條院

68 心にもあらてこの世になからへは  
こひしかるへき夜はの月かな

儀同三司母

54 わすれしの行末まではかたければ  
けふをかきりのいのちとかな

右大将道綱母

53 なけきつゝひとりぬるよのあくるまは  
いかにひさしき物とかはしる

能因法師

69 あらし吹三室の山のもみち葉は  
たつたの河のにしきなりけり

良暹法師

70 さひしさにやとを立出てなかむれば  
いづくもおなし秋のゆふくれ」(4紙)

崇徳院

77 せをはやみ岩にせかるゝたき河の  
われてもすゑにあはむとそ思

## 待賢門院堀河

80 なかからむ心もしらすくろかみの  
みたれてけさは物をこそおもへ

## 法性寺入道前関白太政大臣

76 和田の原こきいて、見ればひさかたの  
雲るにまかふおきつしらなみ

## 左京大夫顕輔

79 秋風にたなひく雲のたえまより  
もれいつる月のかけのさやけさ

## 源兼昌

78 あはち嶋かよふちとりのなくこゑに  
いく夜ねさめぬすまのせきもり

## 藤原基俊

75 ちきりをきしさせもか露を命にて  
あはれことしの秋もいぬめり

## 道因法師

82 おもひ侘さてもいのちはあるものを  
うきにたへぬはなみたなりけり

## 藤原清輔朝臣

84 なからへは又このころやしのはれむ  
うしと見し世そ今はこひしき

## 俊恵法師

85 夜もすから物おもふころはあけやらぬ  
ねやのひまさへつれなかりけり

## 後徳大寺左大臣

81 郭公なきつるかたをなかわれは  
たゝありあけの月そのこれる

## 皇太后宮大夫俊成

83 世中よ道こそなけれおもひいる  
山のおくにも鹿そなくなる

## 西行法師

86 なけゝとて月やはものを思はする  
かこちかほなるわかかなみたかな

## 皇嘉門院別当

88 なにはかたあしのかりねの一夜ゆへ  
身をつくしてやこひわたるへき

## 殷富門院大輔

90 見せはやなをしまのあまの袖たにも  
ぬれにそぬれしいろはかはらす

## 式子内親王

89 玉の緒よたえなはたえねながらへは  
しのふる事のよほりもそする

## 寂蓮法師

87 むら雨のつゆもまたひぬ棋の葉に  
霧たちのほる秋のゆふくれ

## 二条院讃岐

92 我恋はしほひに見えぬおきの石の  
人こそしらねかはくまもなし」(5紙)

## 大納言公任

55 滝のいとほたえてひさしく成ぬれと  
名こそなかれて猶きこえけれ

## 清少納言

62 夜(を)こめて鳥のそらねははかるとも  
世にあふさかのせきはゆるさし

## 和泉式部

56 あらさらむこの世のほかのおもひ出に  
いまひとたひのあふ事もかな

## 大貳三位

58 ありま山ゐなのさゝはらかせふけは  
いてそよ人をわすれやはする

## 赤染衛門

59 やすらはてねなまし物をさ夜更て  
かたふくまでの月を見しかな

## 紫式部

57 めくりあひて見しやそれとも分ぬまに  
雲かくれにし夜はの月かな

伊勢大輔

61 いにしへのならの宮このやへさくら  
けふ九重にほひぬるかな

小式部内侍

60 大江山いく野のみちのとをければ  
またふみも見すあまのはしたて

権中納言定頼

64 朝ほらけうちの河霧たえくくに  
あらはれわたるせゝのあしろ木

左京大夫道雅

63 今はたゝおもひたえなむとはかりを  
人つてならていふよしもかな

周防内侍

67 春のよの夢はかりなる手枕に  
かひなくたゝむ名こそおしけれ

大納言経信

71 ゆふされば門田のいなはをとつれて  
あしの丸屋にあきかせそふく

前大僧正行尊

66 もろともにあはれとおもへやまさくら  
花よりほかにしる人もなし

前中納言匡房

73 高砂の尾上のさくらさきにけり  
とやまのかすみたゝすもあらなむ

祐子内親王家紀伊

72 をとにきくたかしのはまのあた浪は  
かけしや袖のぬれもこそすれ

相模

65 うらみわひほさぬ袖たにある物を  
こひにくちなむ名こそおしけれ

源俊頼朝臣

74 うかりける人をはつせの山下風よ  
はけしかれとはいのらぬものを」(6紙)

後京極摂政前太政大臣

91 きりくすなくや霜夜のさむしろに  
衣かたしきひとりかもねむ

前大僧正慈円

95 おほけなくうき世の民におほふかな  
わかたつ袖にすみそめの袖

参議雅経

94 みよし野の山の秋かせき夜ふけて  
ふるさとさむく衣うつなり

鎌倉右大臣

93 世中はつねにもかもななきさこく  
あまの小舟のつなてかなしも

正三位家隆

98 風そよくならの小川のゆふくれは  
みそきそ夏のしるしなりける

権中納言定家

97 こぬ人をまつほの浦のゆふなきに  
やくやもしほの身もこかれつゝ

入道前大政大臣

96 花さそふあらしの庭の雪ならて  
ふり行ものは我身なりけり

後鳥羽院

99 人もおし人もうらめしあちきなく  
世をおもふゆへに物おもふ身は

順徳院

100 百敷やふるき軒はのしのふにも  
猶あまりあるむかしなりけり」(7紙)

- |         |         |         |         |         |         |         |         |         |          |          |          |          |          |          |          |          |          |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| ①       | ②       | ③       | ④       | ⑤       | ⑥       | ⑦       | ⑧       | ⑨       | ⑩        | ⑪        | ⑫        | ⑬        | ⑭        | ⑮        | ⑯        | ⑰        | ⑱        |
| 異本<br>1 | 異本<br>2 | 異本<br>3 | 異本<br>4 | 異本<br>5 | 異本<br>6 | 異本<br>7 | 異本<br>8 | 異本<br>9 | 異本<br>10 | 異本<br>11 | 異本<br>12 | 異本<br>13 | 異本<br>14 | 異本<br>15 | 異本<br>16 | 異本<br>17 | 異本<br>18 |
- ① 極札 【影印】

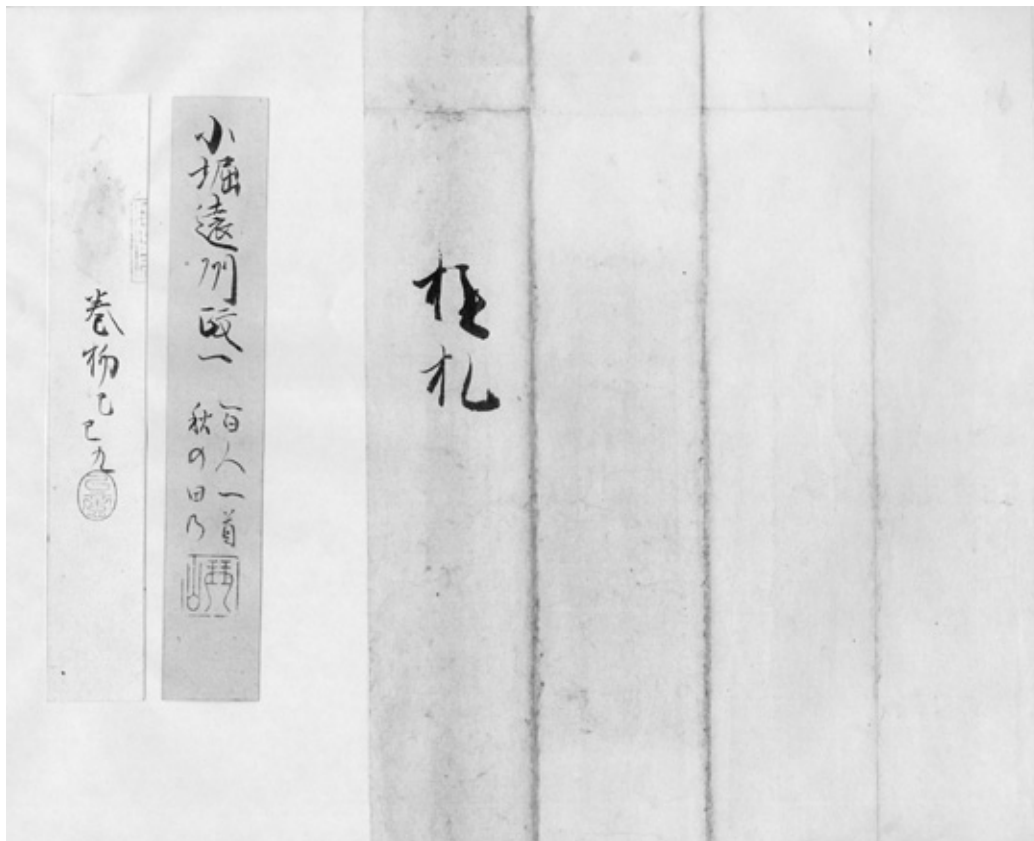


図1 極札



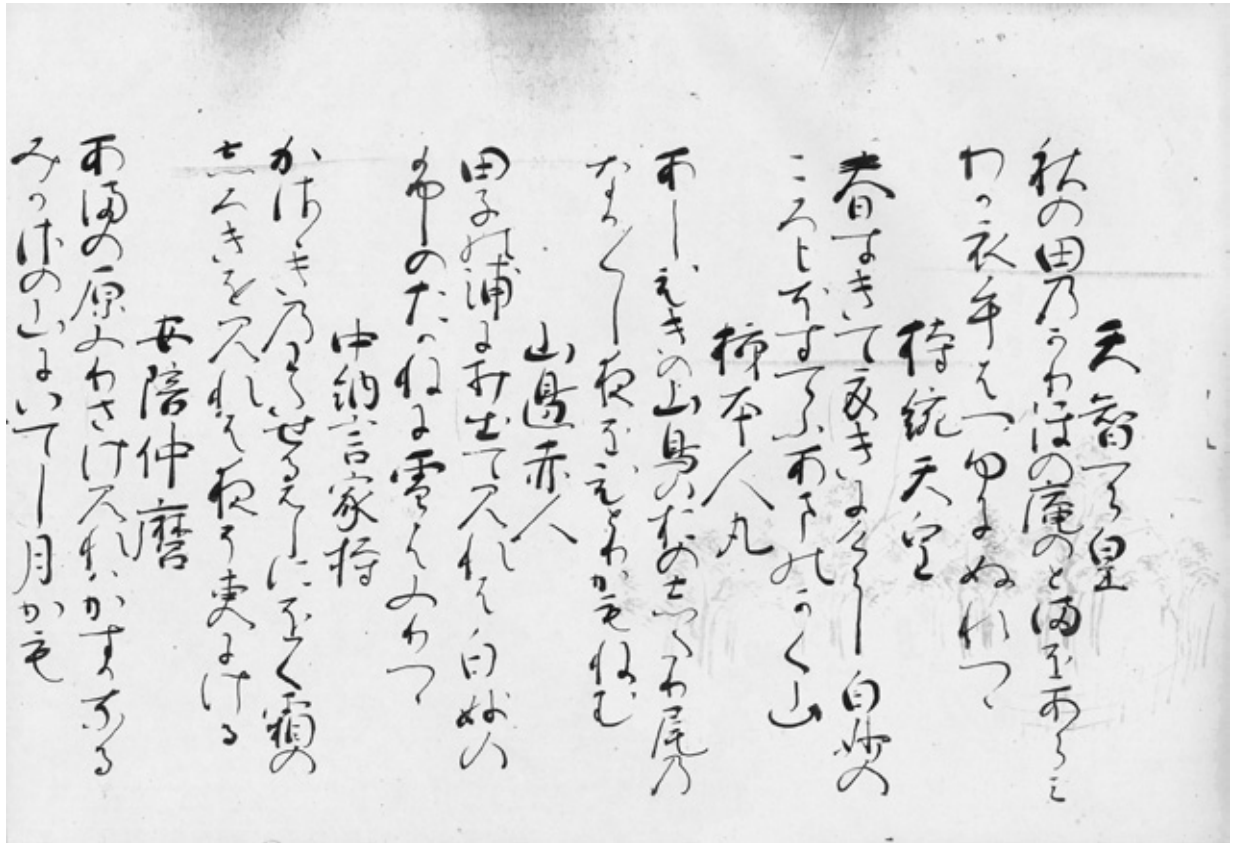


図2 異本1

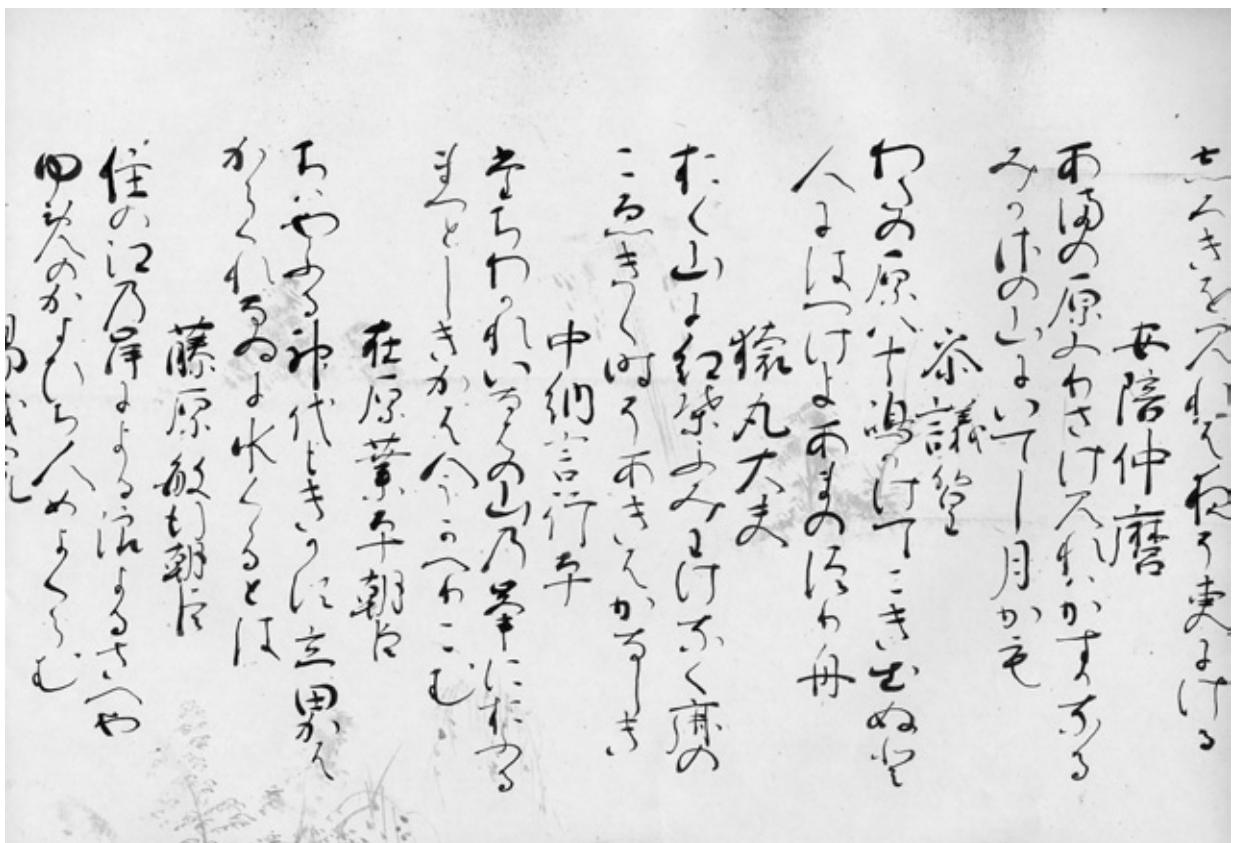


図3 異本2



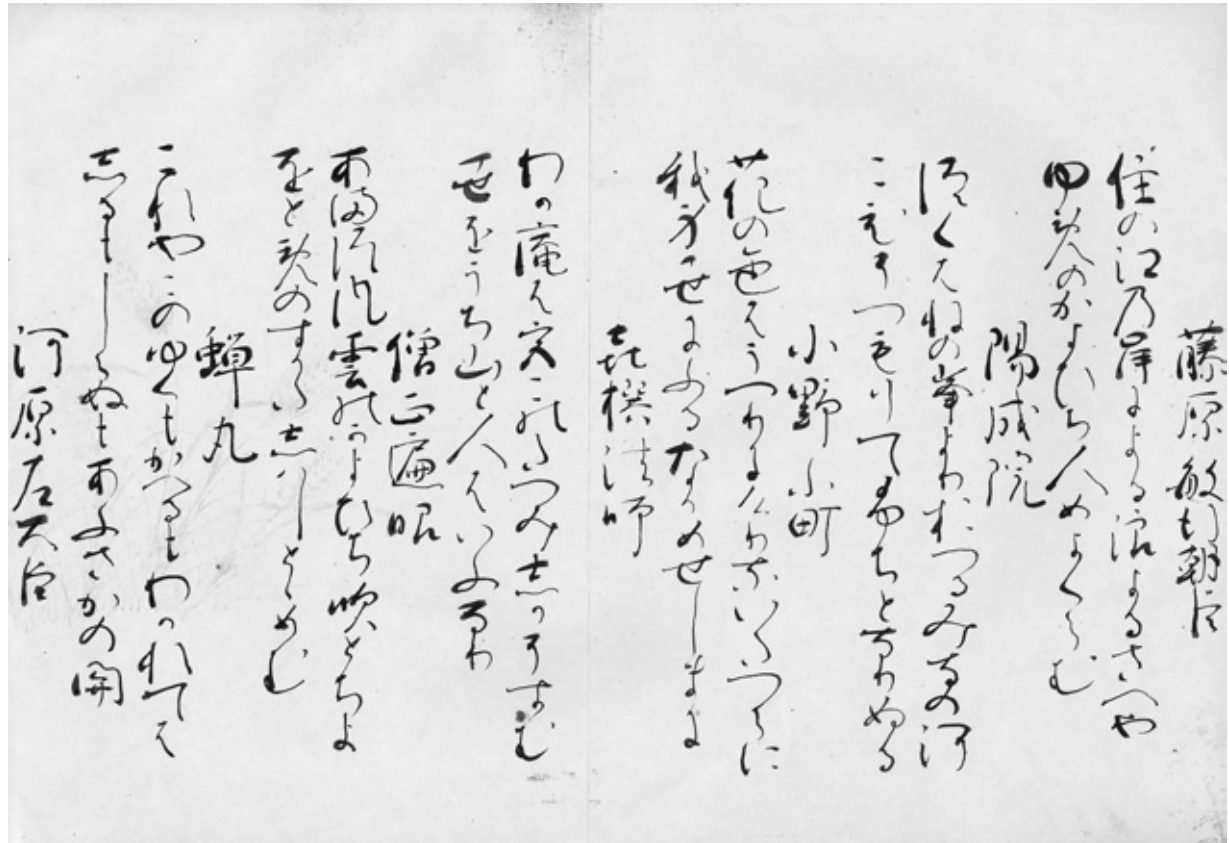


図4 異本3

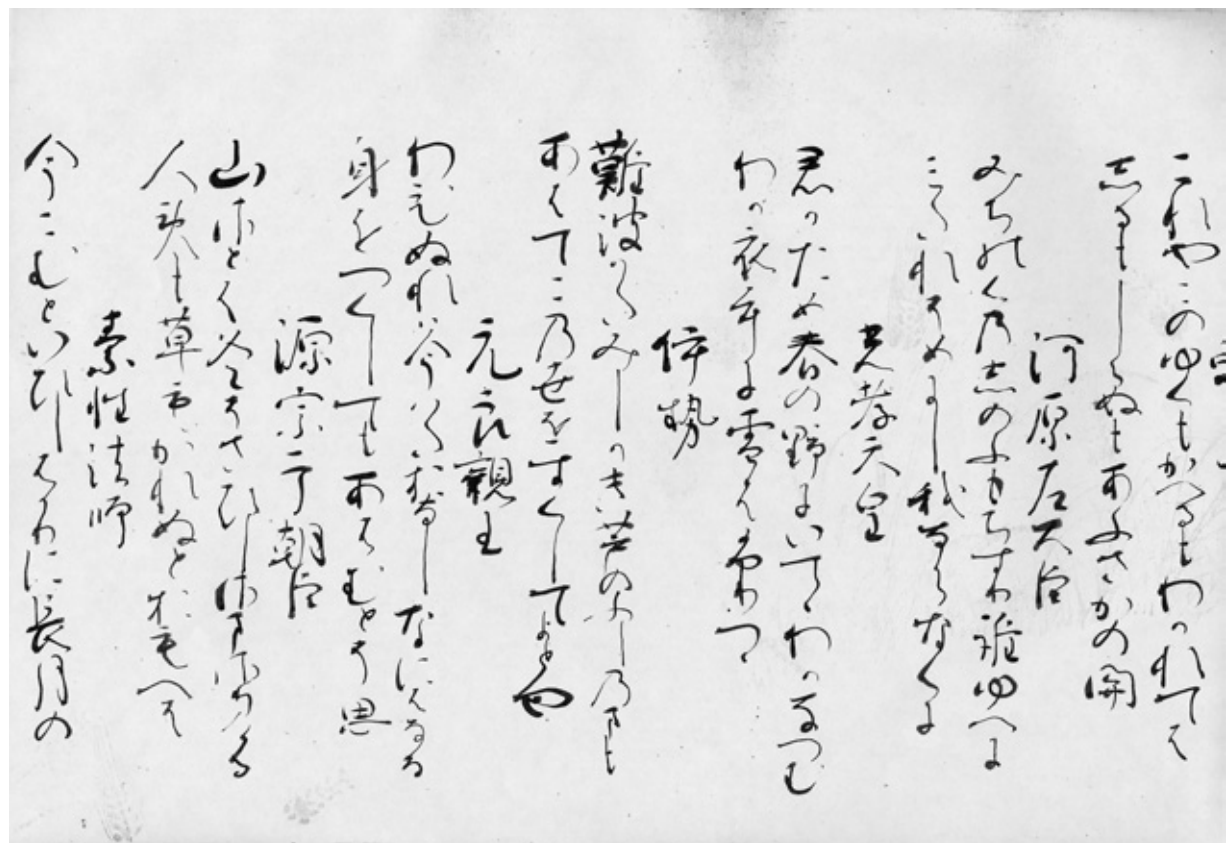


図5 異本4

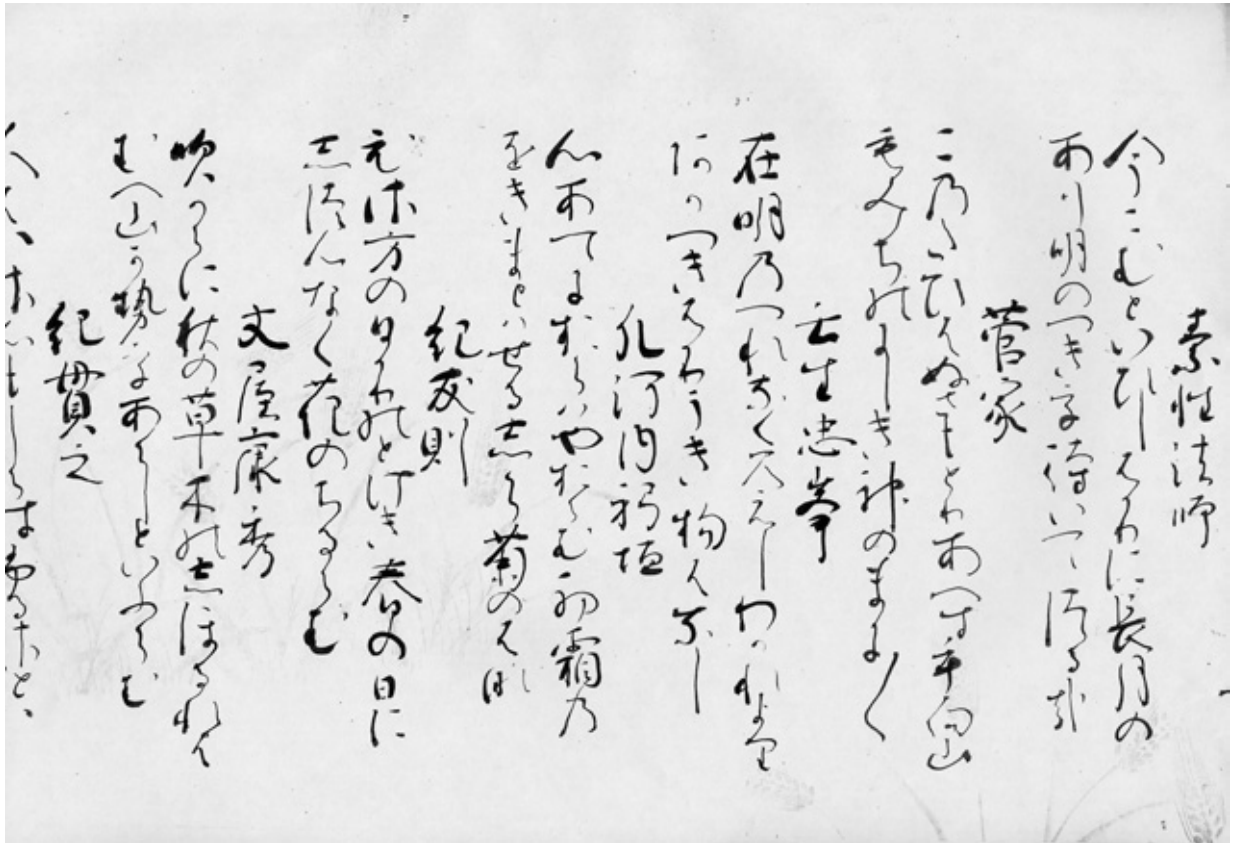


図6 異本5

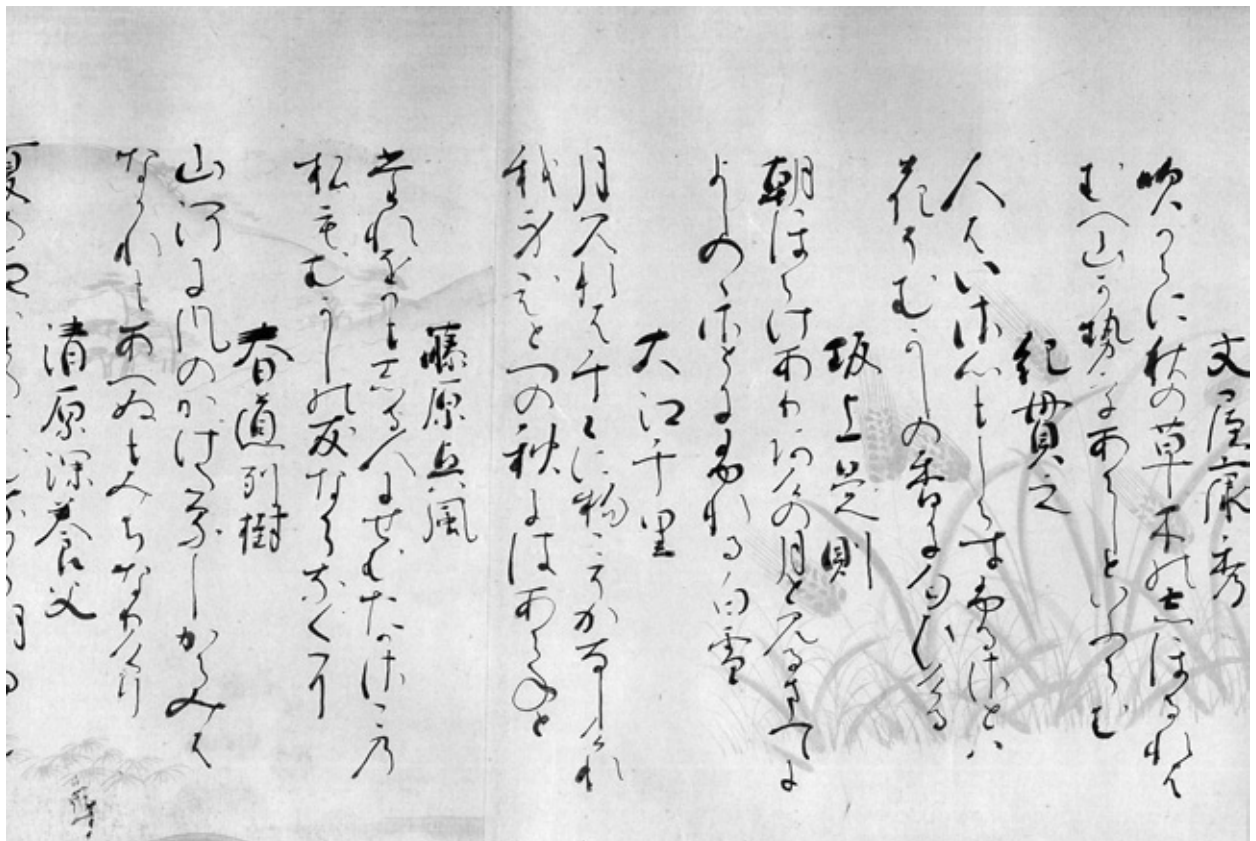


図7 異本6



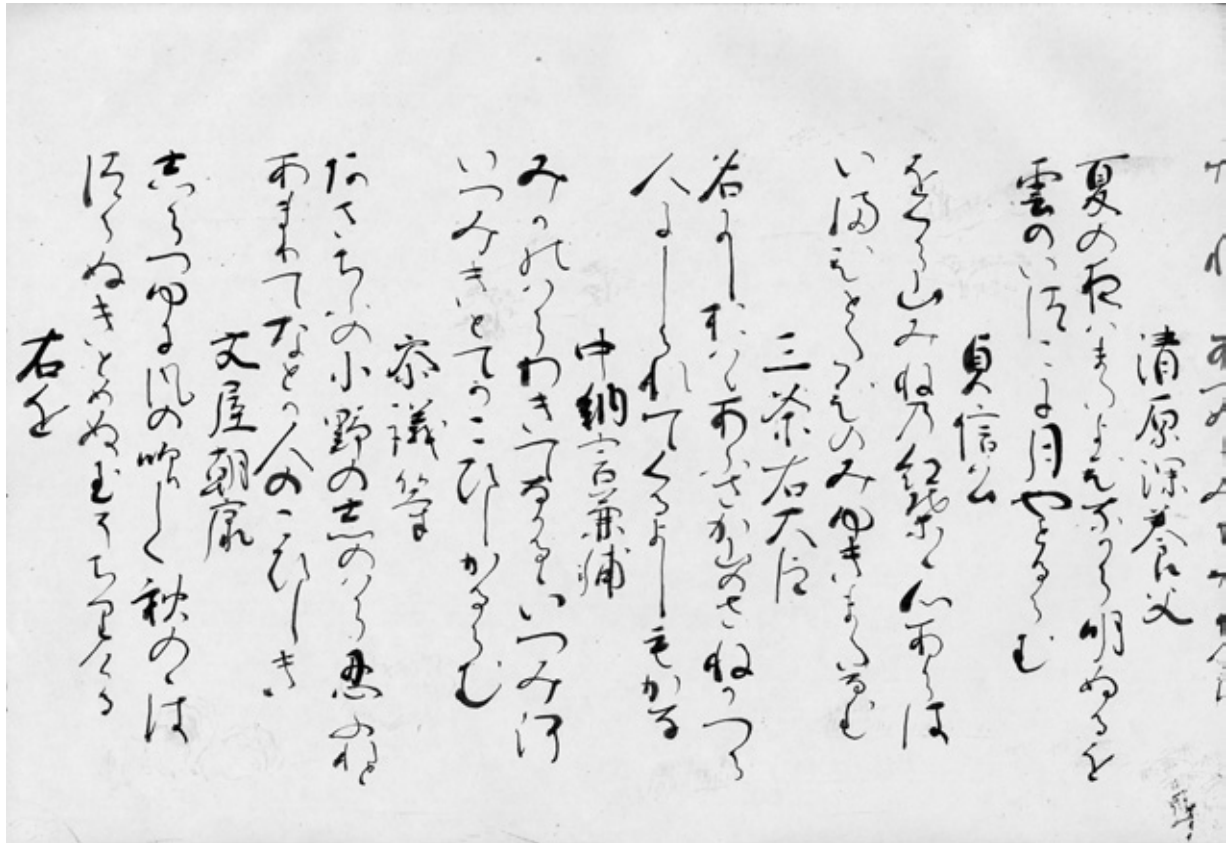


図8 異本7

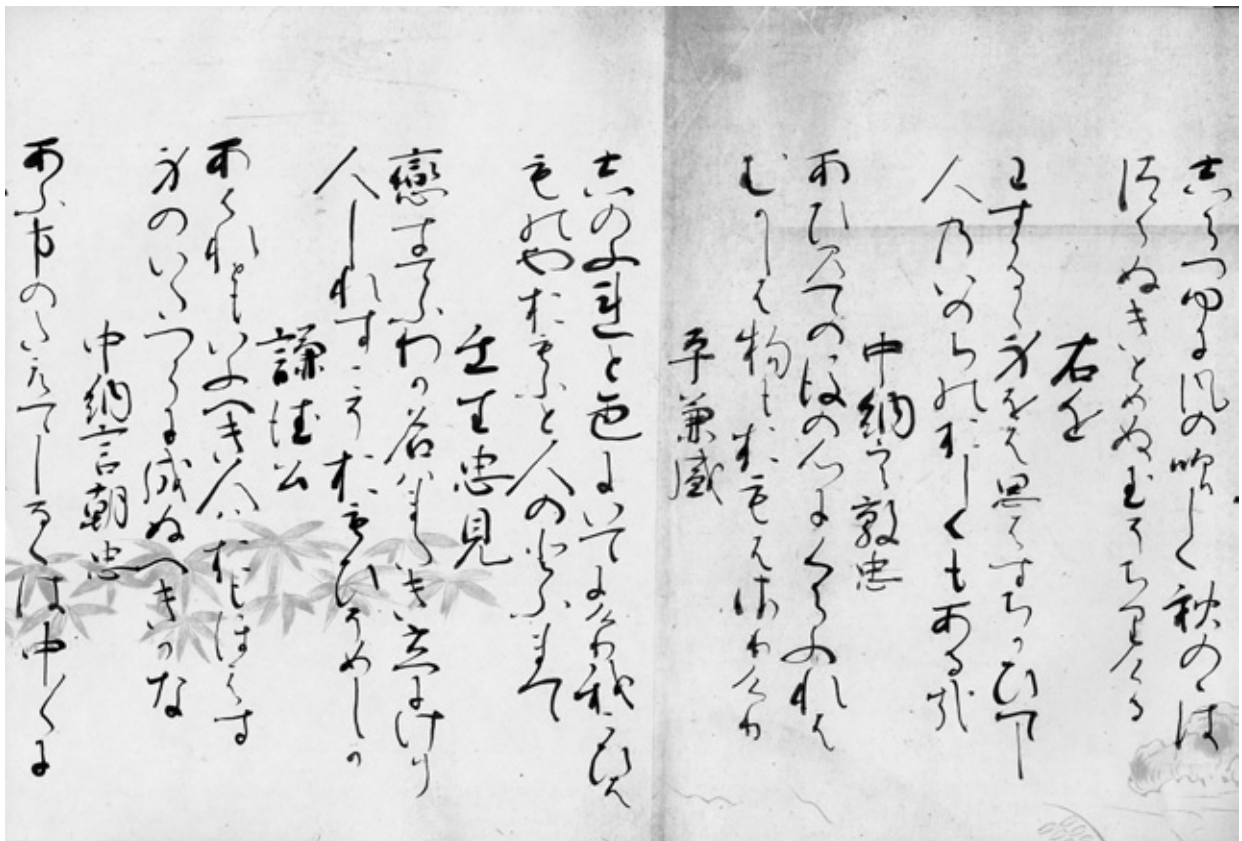


図9 異本8

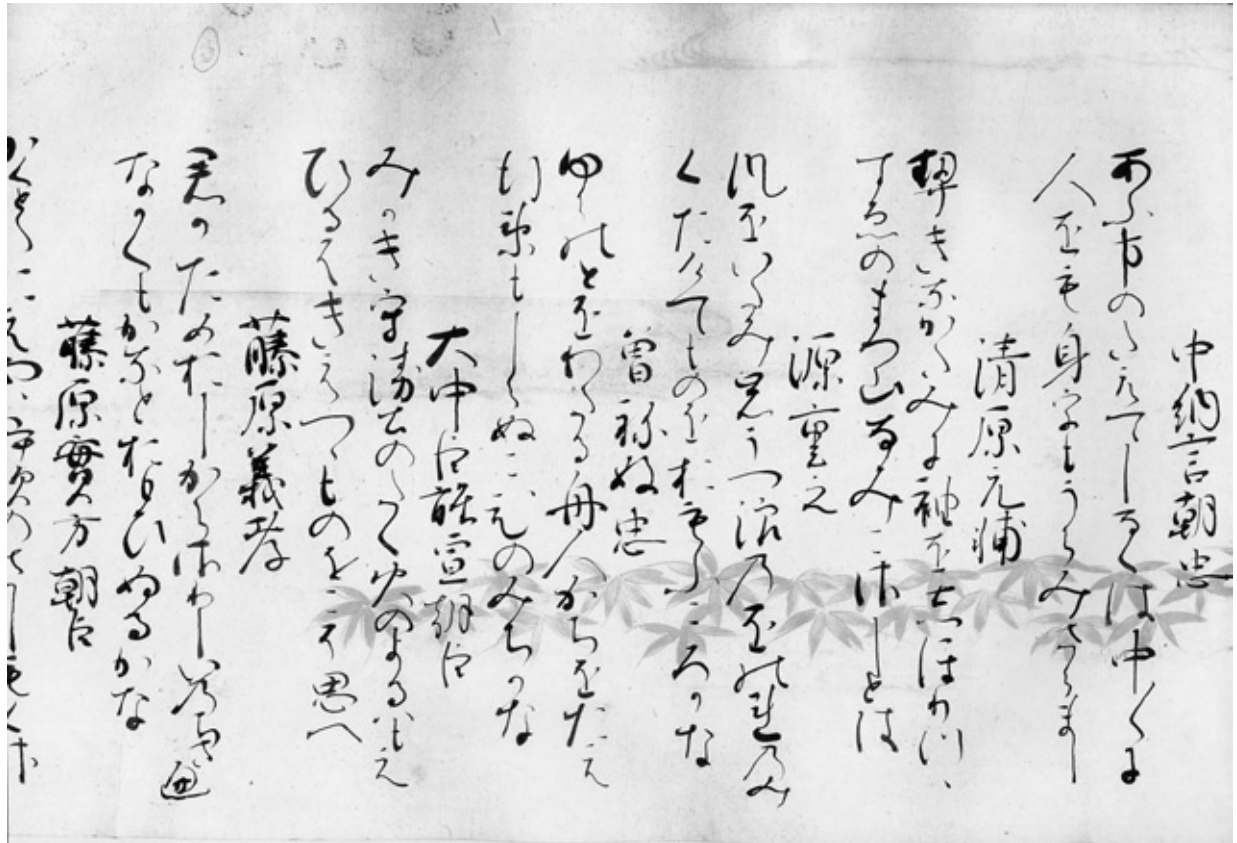


図10 異本9

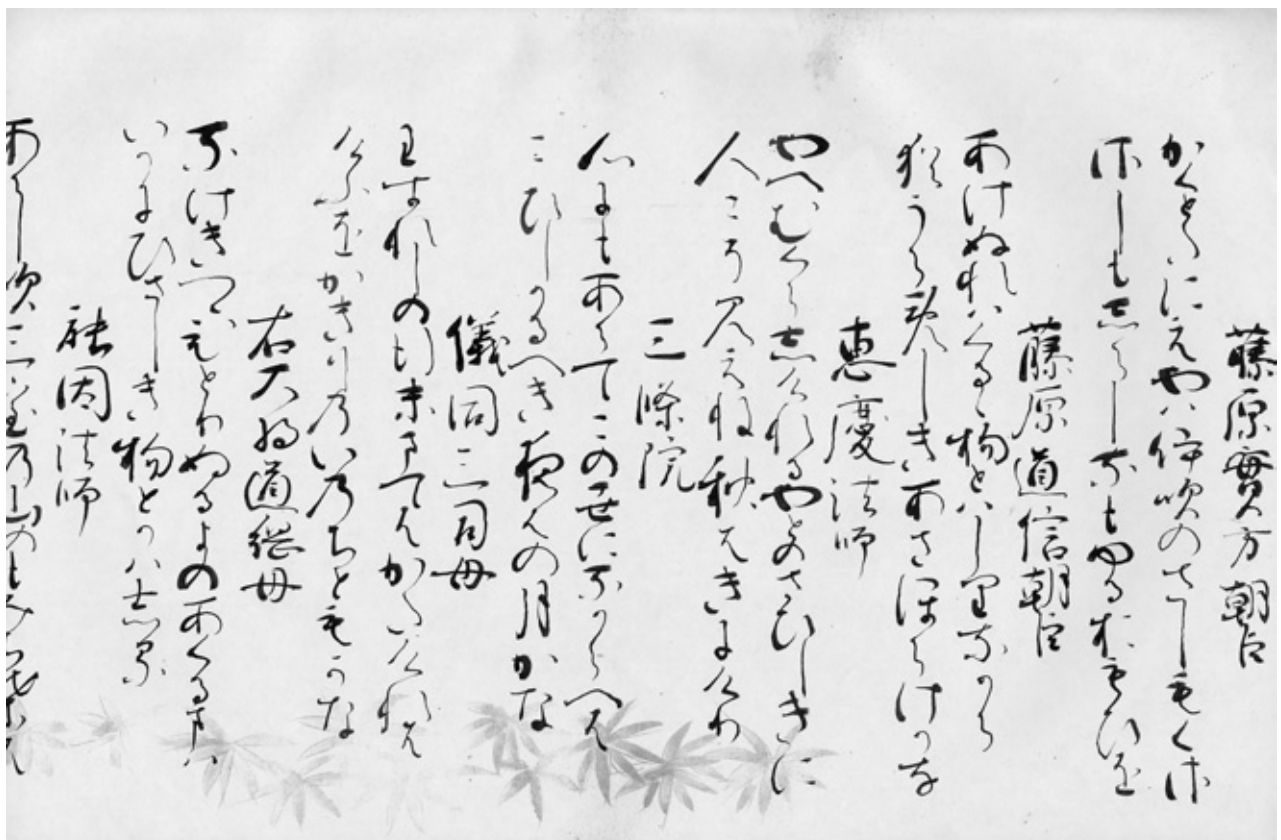


図11 異本10



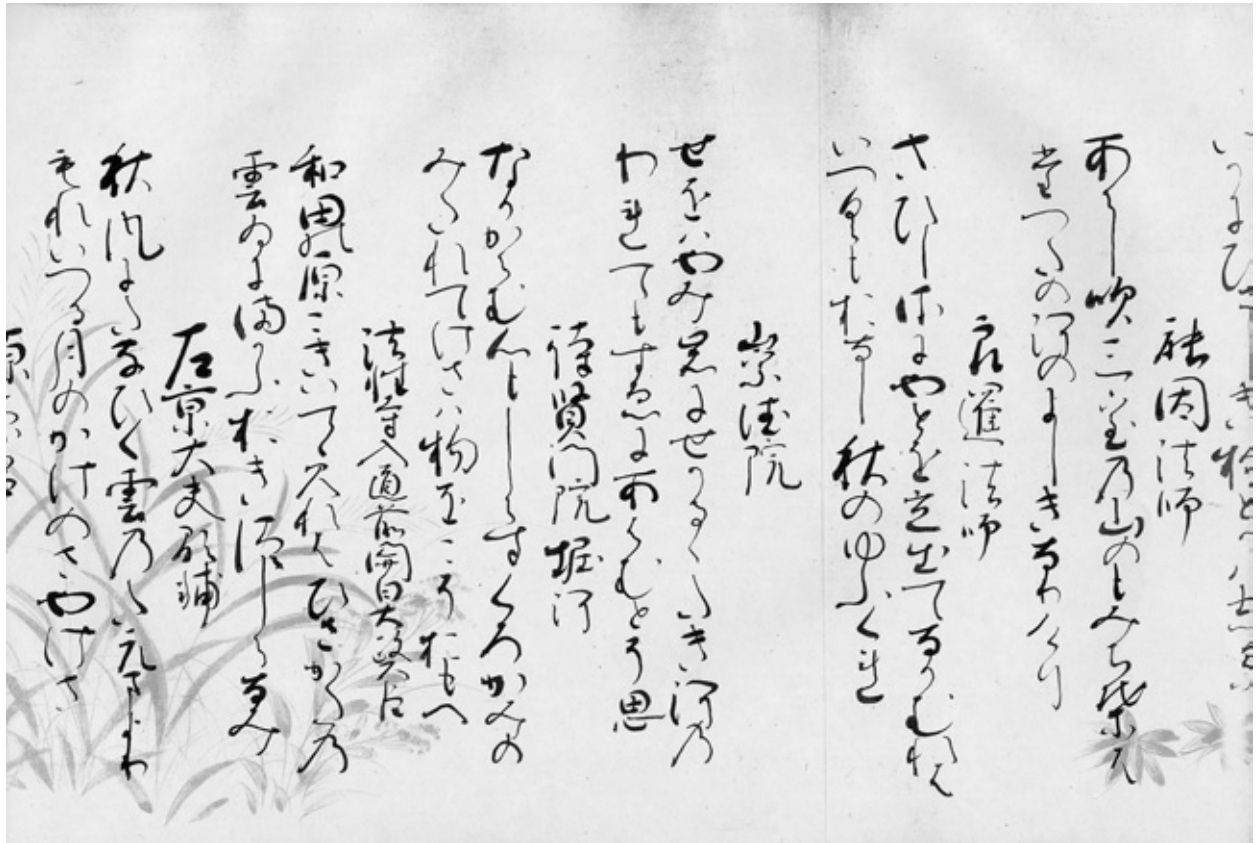


図12 異本11

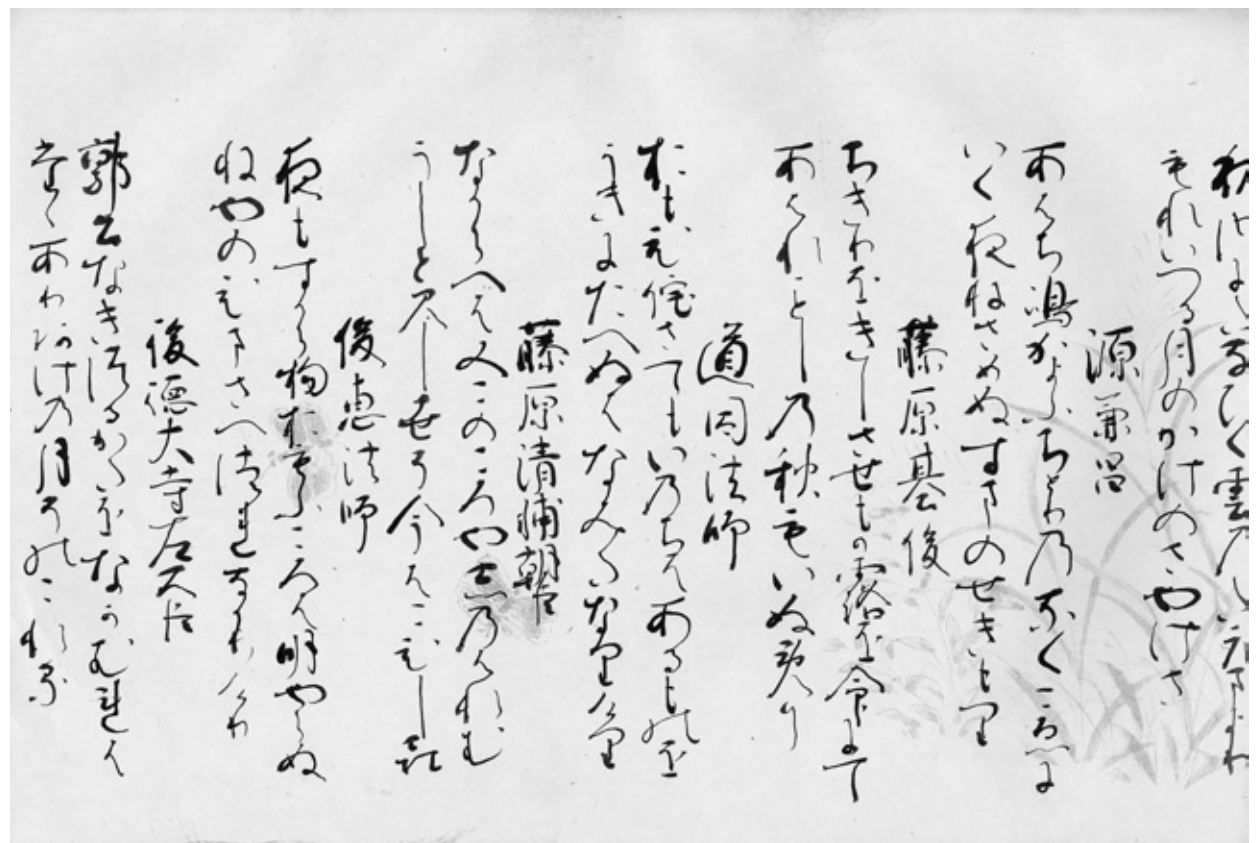


図13 異本12

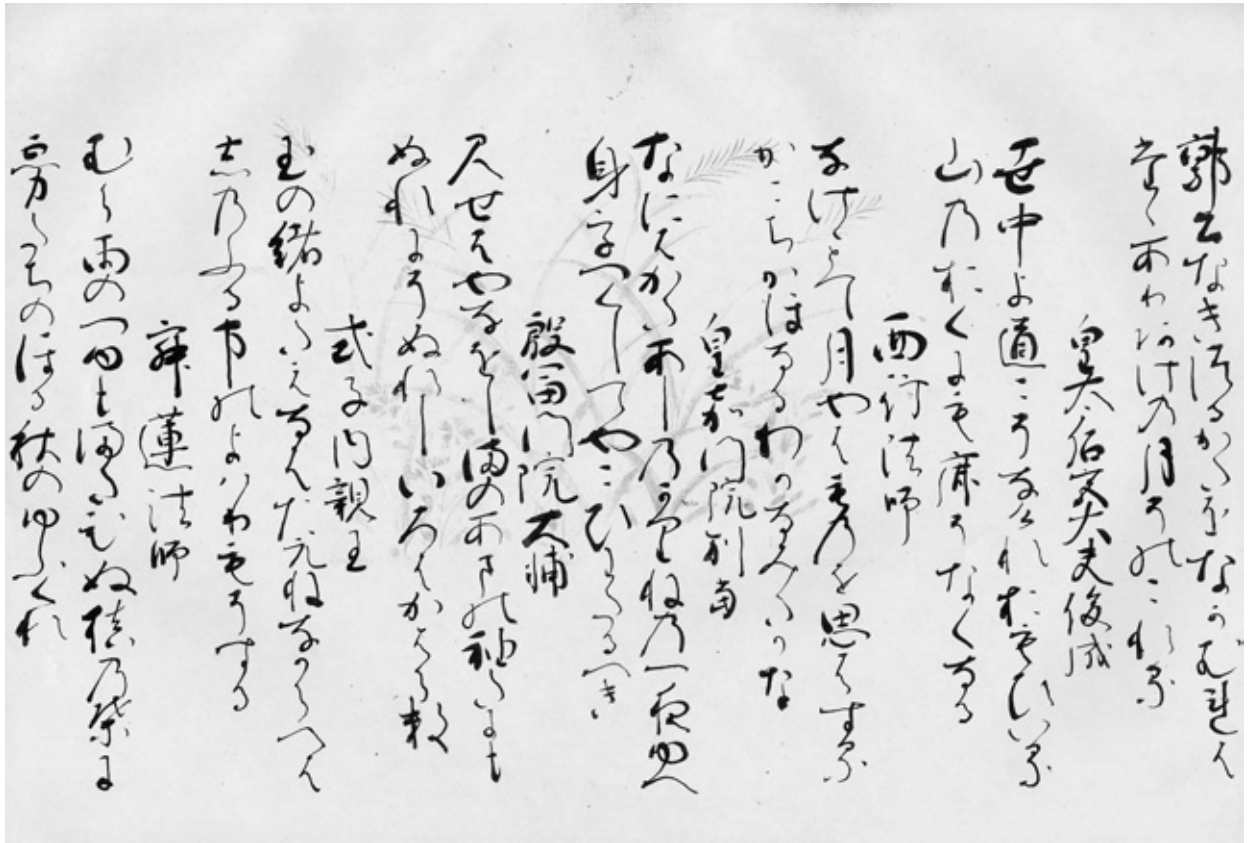


図14 異本13

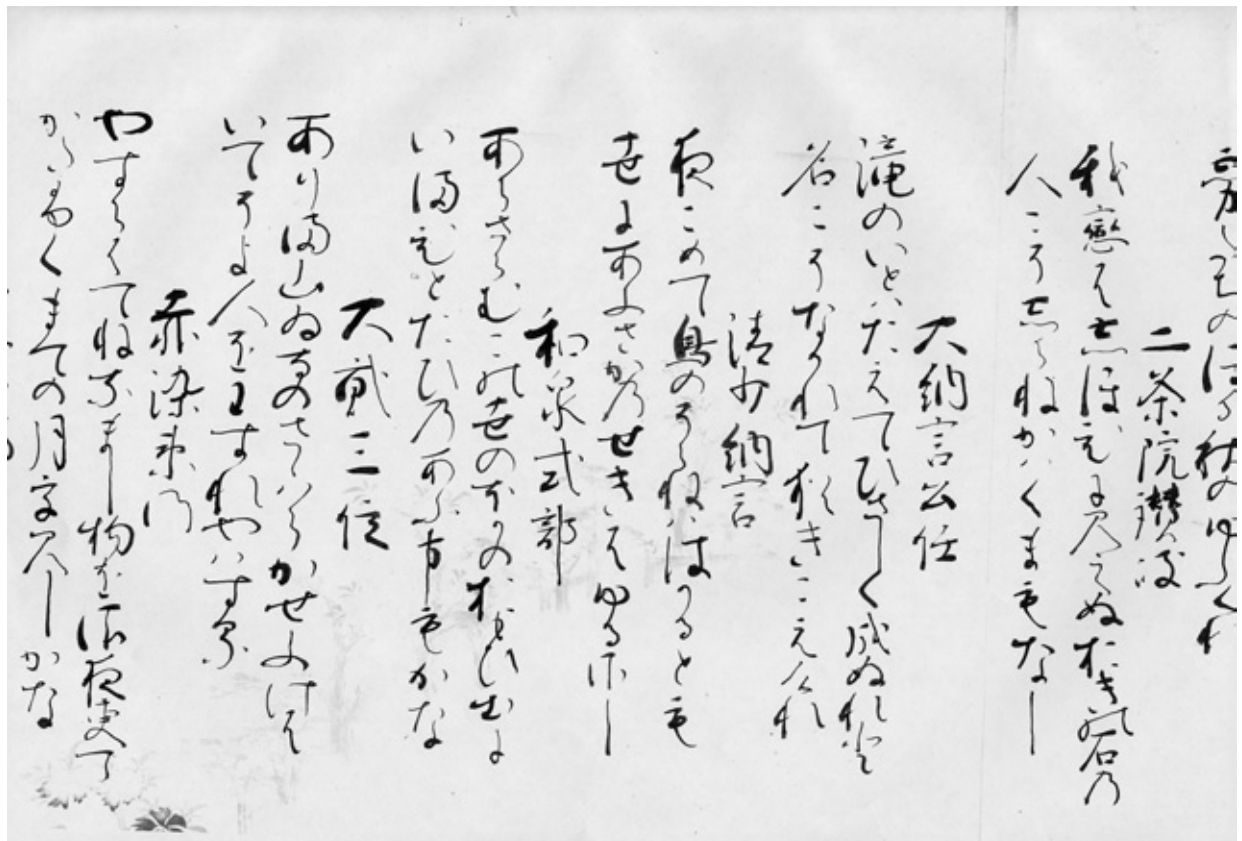


図15 異本14



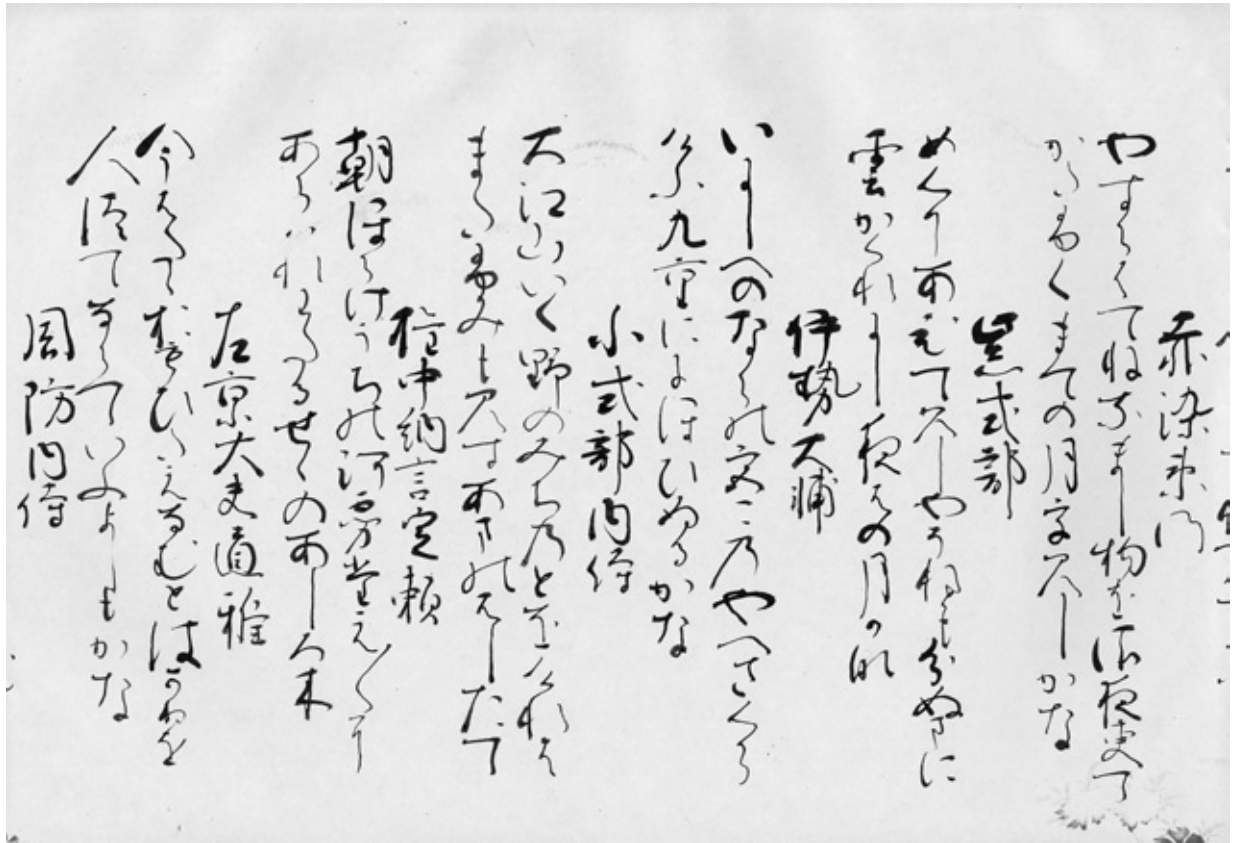


図16 異本15

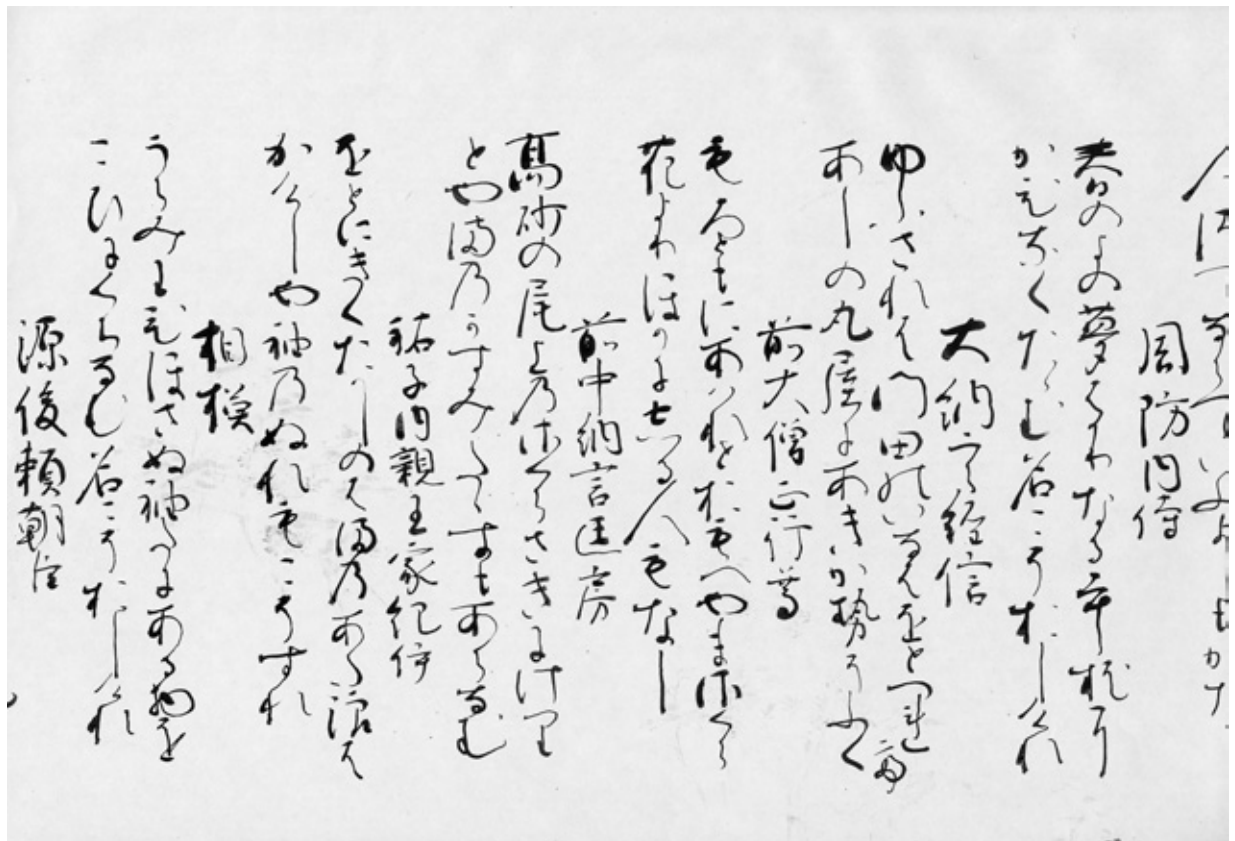


図17 異本16

